



昭和四年九月廿五日印刷
昭和四年十月五日發行

非賣品

蘆花全集

著作權
所有者

德富愛子

蘆花全集刊行會代表

發行者

佐藤義亮

印刷所 富士印刷株式會社

第十七卷

製本所 新潮社小石川製本部

東京市牛込區矢來町七十一番地（振替東京二七一〇〇）

發行所

新潮社內

蘆花全集刊行會

電話牛込（八〇五番・八〇七番・八〇八番・八〇九番）

富士

第二卷

大正十五年二月十一日初版

第二卷

第一章 あらめ屋

一

筆持つ手をのばして、熊次は卓越しに縁側の障子を少し引きあげた。まだ盛に雪が降つて居る。今朝から降り出して、もう一尺から積つて居さう。冬知らずの筈な逗子に、來早々案内大雪ではある。人通りも稀な前の三崎往還から、川向ふの養神亭かけて眞白な中を、唯一條滿潮時の田越川がドス黒く揺らいで居る。紛々霏々^{ふん／＼}と絶え間なく降りこむ雪も、あの黒い水を如何^{どう}する事も出来ない。其かはり其處に錨を下ろして居る一隻の伊豆舟は、苦の上堆く雪をかついで、今にも沈みはせぬかと危ぶまれる。あの篷の下にふりこめられて若し人が居るなら、嘸わびしいことであらう。それとも沖中で此風雪に出會はさなかつたを勿怪^{もつひ}の幸に、先刻陸で一杯引つかけて來て、今はあの眞白い篷の下で案内高軒で寢て居やうも知れぬ。

颯ツ——と一陣北風の吹雪を眞額にうけて、熊次はびしやり障子をしめた。さら／＼と障子を雪の撲つ音がしきりして、止むだ。筆を描いて、熊次は卓に頬杖をついた。黒地に緑の唐草模様を出した羅紗の被をした此卓は、一昨日の朝まで東京は赤坂氷川の新剛纂の小庭に面ふて床の間近く据わつて居た其卓である。簞笥諸道具は靈岸島から船便に託したが、卓は汽車の手荷物で持つて來た。駒子があぶながらに頓着なく、熊次はそれを蒲團包みにした。あらめ屋で荷を解くと、案の定、卓の脚が一本とれて居た。熊次は顔をしかめた。家主の太兵衛さんが見かねて、金鉈と釘で兎に角ぐらつかぬ程度にしてくれたので、熊次は昨日から早速仕事を始めたのであつた。それは家庭雜誌新年附録の短篇小説であつた。去年の夏の附録を手紙一本で斷つて以來、家庭雜誌には筆を絶つて居たが、今年は新しく出直すつもりで新年附録を引受けた。新年と云ふても、月の中旬に雜誌は出るものであつたが、引越し騒ぎに日を過して、締切りが迫つて居た。昨日からせつせと書いて、短篇はあらかた出來て居た。熊次はそれを「漁師の娘」と題した。昨秋遊んだ霞が浦を背景にとつて、人間に失望した親不知の女兒が自然に消え入る、といふ筋の散文詩であつた。

北向きの八疊は寒い。熊次は借り物の角火鉢に手を翳した。而してまだ住みつかぬがらんとした室内を見廻はした。中央を格子障子にした重たい板戸で隔つ南隣の臺所の方では、カタコトと時々小さな音をさして、駒子が夕食の仕度をして居る。雪はまだ降つて居るらしく、ひっそりしいんとした中

を、時には咽^{むせ}ぶやうな、また唸るやうな音がするのは、それは一昨夜來近づきになつた海の音でなければならぬ。

熊次は目を瞑^{つぶ}つた。つい後にしたばかりの東京生活が、最早夢のやう。過去が遠くなつた。都が遠くなつた。遠くなつた都を、尙遠くするかのやうに、雪が降りくさる。追ひ出されたのではない、われから出て來たものを、丁寧に後から隔ての戸をさゝれたやうな味氣^{あぢき}なさ^さが、こみあげる。

歸らじと出でし都を白雪の何隔つとて降りつもるらむ

——テン、テテン、テン、トン——三味が鳴り出した。川向ふの養神亭である。此雪にも遊びに來て居る客もあるのか。やがて何やら歌ひ出した。

障子の雪明りに聞き耳立つる熊次の頭に、不圖鉢の木の文句が浮んだ。

「あゝ降つたる雪かな、

如何に世にある人の面白ふ候ふらん」

「あゝ降つたる雪かな」面白さうに絃歌に興ずる向きもある。然し自分は？

然^{さう}だ。東京に居たゝまれず、家をたゝみ、逗子に落ちて來て、此あらめ屋の一室に世を佗^わぶる我ではないか。

臉まはたの裏が熱くなると、涙がこぼれさうになつて來た。大きな、弱い眼をもつ熊次は、何かと云へば直ぐ泣き目立つ彼であつた。

頭を掉ふつて、熊次は二たびあたりを見廻はした。涙ぐんだ眼が器械的に西隣を隔ての唐紙からみに落ちると、考が何時しか別路わかみちにそれた。唐紙の向ふは同じ無縁琉球の八疊があつて、それも南向きの潤い臺所も、母の老人會仲間の大杉のお婆さんが舊冬きゅうとうから借りて居るが、今は正月歸京中で、誰も居ない。去年の正月は、其八疊に新婚の鴨志田かもしだ夫妻が棲すんで居た。避寒轉地に父母や幼ない甥等を熊次が此あらめ屋に送つて來て、新婚夫妻合唱がっしやうの讚美歌に耳傾けたも其正月であつた。櫻時まで、夫妻は此隣の八疊に居た。幼い甥等は、鴨志田の小母こははさんから

「福、徳、幸、貧乏、金持、倉持、疝氣持」

と指を折つて數ふる事を教はつた。春秋と才氣さいきに富む夫妻は、然し貧しい生活をして居た。同じ棟に住む肥後家の臺所に、おしんさんはよく輕節を借りに來たり、安部川餅あべかわもちをつくるといふて砂糖を借りに來たりした。肥後の女中は炭がなくなるとこぼした。母屋おもやにも借が溜つて、おかみは好い顔をしなかつた。櫻が咲くと、夫妻は東京に歸つて往つた。ある日曜に、夫妻は麴町の教會に出席し、歸りしなに一寸實家に用があるといふて、おしんさんは會堂の門前で別れた。それつきり彼女は歸つて來なかつた。彼女の母も、女むすめを骨折つて夫へ歸へさうとはしなかつた。おしんさんは到頭鴨志田君を見

捨てたのであつた。去年の正月此あらめ屋で會つて以來、熊次は鴨志田君に會はなかつた。其後澁谷に住み、夏の出水に鯉を手捉へたとかいふて、「戀を失ふて鯉を獲る」と新聞が地口つた報道を熊次は讀んだ。「失樂園主人」と署して、新聞には時々鴨志田君の哀切な小詩が出た。「大磯小磯は霞の中よ」などは、樂しかつた逗子生活も末方の吟と思はれた。才人、才女、好一對と傍目にも思はれたに、何で此様な事になつた乎。其處の八疊で睦じく夫に寄り添ひ編物などして居た惻發げな若妻が、何で思ひ切つた事をする氣になつたか。會堂の門前でさり氣なく別れ、一日又一日、歸るか、歸るかと到頭歸らぬ妻を空しく待つた鴨志田君を思ふと、熊次は胸が痛かつた。

唯一年の間の事である。

戀を得た鴨志田君は、得てそれを失ふた。而して其短かつた舊歡の巢に、躓きがちな三年の結婚生活の後、然も一切を根底から築き直すべく自分は妻と落ちて來た。自分を不幸な者と謂へやう乎？

熊次は長い息をついた。

臺所口の障子があいて、駒子の白い顔が現はれた。

「ランプをつけませうか」

「え。どうぞ。臺所は寒くはないね？」

「いゝえ、ちつとも」

雨戸繰るべく、熊次は立上つた。障子をあけると、蒼白い雪の黄昏、川向ふの絃歌は何時しか止んで、薄暗い空から雪はなほ紛々と際限もなく降つて来る。

二

南へ太平洋に向ひ日本國都東京がわんと開いた大口の上顎を伊豆、下顎を房州とすれば、まさに其扁桃腺に見立てらるゝ三浦半島は、地質學者の言によれば、日本の地盤の中でも極新出來のものさうな。それが人間の住家になつて、石器土器の太古から、橘媛同伴で走水から難航海の舟出をされた、日本武尊の昔、ずつと降つて今も郡の名にし負ふ三浦大助、三浦道寸の鎌倉時代、戰國時代、それから一足飛びに、ペルリの艦が浦賀沖でうつた新日本誕生の祝砲、日本海軍造船の搖籃として横須賀の擡頭まで、長々しい歴史の回顧は之を措く。東京灣の右の扉をうけたまはる東西三里半、南北四里半、面積七方里の三浦半島に規則正しく血が通ひ始めたは、何と云ふても横須賀線開通以後の事である。明治二十年の夏休に、京都から初めて東上した熊次が、兄や宇土君、深水の太郎君などと其夏初めて海水浴開きをした大磯に遊んだ頃、横須賀線の工事はこれからといふ處であつた。中一年置いて、明治二十二年の首夏、熊本から上京間もなく、熊次は兄や宇土君と鎌倉から金澤、江の島かけて三日の遊をした。圓覺寺の山で初めて山百合の花の盛りに出會し、露垂るゝ崖からぬうと偉きな白い顔さ

し出して、むせる程強烈な香を迸らす其花に一驚を喫したも其時であつた。それは横須賀まで全線開通の数日前であつたが、熊次は鎌倉までで歸つてしまつた。二年目の五月、新聞社から休暇をもらつて、初めて横須賀線を終點驛で下車し、浦賀への半途、猿島を向ふに見て東京灣の波穏な大津海水浴に遊んだ。三日目に、其名も同じ江州の大津で、來遊中の露國皇太子ニコラス殿下が護衛の巡查津田三造の白刃に傷つけられた珍事出來を耳にして、直ぐ東京に歸つた。往復に逗子といふ驛を通つた。逗子——變な名だ、と思ふたきり、何の珍らしげもない山際の驛に、熊次は氣もとめなかつた。海に近い驛の感じさへなかつた。然し何の緣か、一月たゝぬに熊次はまた父と其逗子驛を通つた。母の長姉本山のお香伯母の出京で、氷川町の隠宅は女客が立て込み、殊に昔から母を感服者の本山の長女、斬髮頭の大痘痕、尼將軍おしでさんが隱宅に入り浸つていつかな去らぬので、父がたまりかねて避客旅行に熊次を連れて横須賀在の大津へと飛び出したのであつた。いざとなれば矢も楯もたまらぬ性分を、父も子も持つて居た。家を出るには出たが、時間が悪くて其夜は横濱一泊を餘儀なくされ、翌日やつと大津に往つた。三日の大津逗留に雨ばかり降つて、話はなく、父は帳場から借りた活字本の弓張月に讀み耽り、熊次は退屈し切つたものである。往復に例の逗子を通ると、父は興ありげにそこら見廻はし、此海邊に舊藩侯の別莊がある話をした。それどころでなく、汽車の開通以來はやんどないあたりの御用邸も葉山といふ處に建ち、名ある別莊も追々出來て、此邊一帯は大磯、鎌倉に次ぐ避

暑地になりかけて居る事を熊次は知らなかつた。其夏は大磯に避暑した。然し翌明治二十五年の夏は、肥後一家逗子に来て、養神亭のはなれに一夏を過した。別荘へ行く舊藩侯が川越しに腰をかゝむる舊老臣に會釋し、貞助も大分工面がよくなつたと見える、と噂したものだ。お茶の水の女學生菊池駒子が清人兄と来て、養神亭に空室がないので、肥後家族の中に十日置いてもらつたも其時である。大磯より海が穩でよろづ氣安な逗子は、老人子供達の氣に入つた。それから明治二十五、六、七、八年と夏は必逗子に避暑し、明治二十九年の夏は其處に父母養老の住居も成つて、逗子は夏ばかりの逗子ではなくなつた。而して父母が其處に落ちついて半歳たゝぬに、眼を開けば熊次駒子も何時しか東京落ちして、あらめ屋の一室に際限知らぬ生活を始めて居るのであつた。

鎌倉を後に、南へ名越の隧道をぬけると、それから田浦の隧道にかゝるまでの間、汽車は逗子平野を走る。逗子は昔は豆師又は厨子と書いた。吉田東伍の説には、昔の職人名圖師の轉訛であらう、と云ひ、俗説には弘法大師の厨子があつたからの逗子、と謂ふ。兎もあれ大師が行脚時代にはぶら下げたであらう頭陀袋の形をした平野である。海拔三四百尺を越えぬ雜木山松山に三方圍まれて、袋は北西に海へ口を開いて居る。平野の重な創作者を、多胡江川、今は、田越川といふ。田畑村中を悠々とくねり、潮がさすので日の半分は逆に流れ、出水の時でもなければ減多にはきく流るゝ事をせぬのんきな小川である。蛭が小島の昔に思ひ比べ、敵の藁を残す恐ろしさをしみるゝ思ひ知つた源右府

頼朝が平家の根を絶ち蘗を殲す執念は深く、平家の嫡々、重盛には嫡孫、維盛には嗣子の六代御前は其齡十二のいたい氣ざかりを捉へられてすでに沼津の千本松原で斬られる處を、頼朝には睨みの利く僧文覺がやつと命乞ひして法師にしたが、其内頼朝は死し、文覺が朝廷に罪を獲て流罪になると、もう三十になつた弟子の六代も、「髪をば剃り玉ふとも、心までは剃り玉はじ」と召捕られ、到頭此川邊で斬られた。六百餘年前、青々と茂る川邊の蘆に初秋の風わたる陰曆七月二十六日の事である。あれ知る土地の子等は、多胡江川を御最期川と名をつけて、今も其月其日に記念の祭をする。逗子驛から來る葉山——三崎街道は、田越橋で此川を渡る。小田の向ふの小山の裾に、木立こんもりした一堆の邱がある。石段を上れば、章魚根を張つた槻の老樹の下に苔蒸す五輪の石塔、それは六代御前を記念の石塔である。其上一帶の松、雜木山は、昔櫻が多かつた名残りに、今も櫻山の名がある。蘗をめぐつて川に沿ひ街道に傍ふ人家の部落が、字櫻山である。田越橋の少し下流で、川は街道と離れ、松林につゞく蘆の洲をめぐつてゆるく弧を描き、逗子平野の北東から來る、六代御前の屍が流れたからの「身流れ川」を合はせて、川幅濶うなり、道傍一帯の松の間に群を抜いた三百年の老松一樹空に嘯くあたりでまた街道に會ひ、富士見橋をくぐり、尙一丁餘を流るゝともなく海に入る。熊次駒子がはなればなれにはじめて避暑に來た頃までは、此あたりに橋はなく、養神亭へは渡舟で渡つた。

富士見橋から川口までの間、川に街道に傍ひ櫻山を背にして參差とならぶ部落の中程に、ゆつくり

と構へた大きな茅葺が荒茅屋である。「あらめ屋」はもと旅籠屋をして居た頃の屋號さうな。北に三室、南に二室、八疊がずらりならんだ家づくりも、旅籠稼業の昔を思はせる。今は主人は専ら農を業とし、八疊五室の母屋は避暑避寒の客に貸して、家族は母屋の東に鍵形につぎ足した小さな板葺に住み、おかみが荒物店を出し、酒、酢、味噌、醬油其他くさくさ賣つて居る。主の太兵衛さんは手堅い五十男の苦勞人、若い頃から賤い瘠地を買つては手を入れて上田上畑に仕上げ、それを高値に賣つてはまた賤い地所を買ひして、身代を持直した人である。首とつりかへの實印大切に、無筆に近いが、信望があつて、村會議員をして居る。日清戦争に衛生長官として男爵を賜はつた智慧者の赤岩さんは養神亭の定客で、太兵衛さんの人となりをよく知つて居るので、資金は出すが金貸しをせぬかと相談をかけたものだ。太兵衛さんは斷つた。先妻が女一人残して亡くなつた後、先妻の妹を後入に迎へた。親子程年が違ふ夫を嫌つて、お末さんは若い男と逃けた。然し追手が連れ歸つて詫を入れると、太兵衛さんは兎や角言はず元の鞘に納めた。今は女の子二人、男の子一人もつて、丸髻に齒を染めた三十女の赤ら顔、店から裏へかけ油斷なく黒い眼を見張つて、世帯もちに納まつて居る。居酒屋をするので、往復の馬力がよく母屋の藤棚の柱に馬を繋いで、飲食する。間にはおかみの昔知る男が酔つぱらつて、「お末さん、あゝいふ事もあつたつげがな」と面と向つて飄落の昔を素破ぬくと、おかみはにや／＼苦笑して、それが爲勘定の一錢も負けるやうな事をしなかつた。總領娘は葉山に別莊をもつさる大名華

族の家に小間使奉公して居、次の娘は小學校通ひ、嗣子の貞公は今年六歳のわんぱく盛り、大人の眞似して卷簾片手に屹と人を見上げる眼はおかみ其まゝである。以前は店の細長い土間に二十歳餘の女が立働いて居るをよく見かけたものだ。それは先妻の女で、夫に死なれ男の子一人連れて戻つて來て居るのであつた。其女も去年亡くなり、今はおかみの實母が來て、孤になつた孫の虎吉を世話し、太兵衛さんの農事の手傳ひなどとして、まめに働いて居る。七十近いきつい氣のお婆さんはよく働くかはり、時々癪を起して木小屋に寝た。駒子が見かねて時々やはらかい食べ物を持つて往つたりしてやつた。また喰べ過ぎだよ、とおかみはやさしくしなかつた。ぶつ／＼こぼしながら、お婆さんは其内また起き出て働いた。「おつかさん、鮭を焼いときましたよ」と太兵衛さんが姑をいたはつた。「さゝほうかいねエ」と孫の虎吉をあやして居る事もあつた。熊次の父は「太兵衛さん」と呼び、母は「おとつさん」といふた。熊次駒子は三人稱で太兵衛さんと呼ぶ時、いつもP公と曰ふた。Papaの頭字である。P公の道樂は酒である。鬱はらしにも、くたびれ休めにも、酒である。どうかすると、朝から始めて居た。夜は一日の勞働に疲れ切つて、風呂の中で駒々を立てた。獨酌の手すさびに、孫の虎吉にも飲ませたりして、五歳兒が赤い頬をして破蒲團に小さな躰をかけた。

二

以前熊次の父母が居た日あたりのよい南向きの八疊と其前室ともいふべき北向きの八疊は、東京は深川の商家の隠居夫婦が借りて居、同じ南向きの八疊の臺所とそれにつらなる北向きの八疊は大杉のお婆さんに貸してあつたので、熊次駒子が借り得たは北向きの中の八疊一室に過ぎなかつた。天井、大黒柱、建具などすべてがつしりした田舎普請の黒光るまで時代がついて居るに、舊冬さながら待ちまうけのやうに換へたばかりの無縁琉球の眞新しいのが氣もちが好かつた。室代は月二圓、夏場だけ月五圓といふ約束であつた。先には此室の東南の隅に觀音開きの佛壇があつて、ある夏其處から青大將がよろ／＼這ひ出して來た事があつたりしたが、今は取り拂はれて、其あとにニス塗りの西洋簞笥が嵌め込みになつて居た。以前永らく此家を借りて居た海軍人の置土産といふ事で、英國出來らしい櫛製の素晴らしい大型の簞笥である。如何様に大きな畫用紙でも樂に納まりさうなのが、何より熊次にありがたかつた。臺所の八疊は大杉さんに貸してあるが、留守ではあるし、炊事場は自由にお使ひ下さい、といふ家主の挨拶であつた。八疊から段落ちの流しにつゞく板の間もゆつくりして、農具木臼など隅に置いた土間の潤々したのが田舎らしくて好かつた。井は裏口に直ぐ近く、砂地に低い苔蒸した切石の井戸側、蓋にのせた一つ釣瓶の竹竿が今は裸の無花果の木に立てかけてある。井は浅いが鹹氣は絶えてなく、軟かい良い水である。雞の家族の、くゝとあさる砂地に物干しが立つて、向ふは直ぐ縁三寸の小麥畑、兩隣は斜に引込んだ何れも農家。小麥畑の一丁向ふは、高さ三百尺の屏風を立

てたやうな櫻山、峰には黒松が立並び、山腹はかさ／＼した枯萱が一面白茶色の波をうたして居る。
着いた翌朝から、夫妻は自炊生活を始めた。隠宅から母が梅干を持たしてよこした。それからは決して構ふ事をしなかつた。夫妻も心を引きしめた。すべての負債を拂ふまで、月十圓で生活の方針を立てた。買ひ置ききのヘットを持つて來たので、駒子はよく肉ぬきの葱の緑がちで硬いやつを焼いて食はした。稀に卵でも落せば、恐ろしい贅澤であつた。前川の潮が干ると、二人は養神亭下の砂に下りて小さな浅蜆を掘つてはうまい貝のつゆが出來た。濱で拾ふ雞冠苔は刺身をはなれてもこり／＼してうま／＼、緑の毛絲を一房剪り摘へたやうな松藻はしやき／＼し、褐色の素麵を束ねたやうなオゴは三盃酢でもよく、味噌汁の實にもならない事もなかつた。藥味が欲しければ山に自然生の山椒の木も苗もあり、摘めば田圃に芹も薺も土筆嫁菜もある。山で採る山みつばは畑のより香氣が高く、石落は落よりうまいが、それはもつと暖かになつての事である。豆腐は山の根から毎日賣りに來る。蒼い顔して胡散臭い眼をした丁髷の五十男は、昔の大聖舜ならなくに姉妹二人を妻にして居るさう。葉山から日々魚の荷を擔いで爺さんが賣りに來る。南國の海邊に生れて魚でぞだち、今も刺身なしでは夜が明けぬ熊次の父が以前の得意で、仲よしである。天蠶絲のやうな黄白い髪を丁髷に結ふて、眼口鼻の大きい、俠客肌の惣五郎爺さんは、きまつてあらめ屋の前で荷を下ろした。如何かすると商賣そちのけに、居合はす者を相手に、てきばきした口調で何角と話し込んだ。其家近く別莊をもつ「天子様